
黄泉の国からこんにちわ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉の国からこんにちわ

【Nコード】

N7545K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

ある日、突然おばあちゃんが死んでしまった。

「おばあちゃん、おばあちゃん起きて起きて」

さっさと

迫田真子は祖母の部屋から飛び出してきた。

「パパー、大変。おばあちゃんが、おばあちゃんがー」

義母の貞子が亡くなって1カ月。家の中が妙に静かで居心地が悪い。まだ、70歳だった。心臓マヒで寝込むことなく呆気なく死んでしまった。その前日、みんなでゴールデンウィークに近くの温泉に行こうと計画したばかりだった。真子は小学校6年生、妹の法子は3年生。来年からは中学校生活だから今年が最後になるかという話だった。計画の発起人は義母の貞子だった。

本人が計画して死んでしまうなんて誰も予想していなかった。義母は60歳まで学校給食の仕事していたから、退職金も年金も入るから、時々は娘たちだけでなく嫁の美沙子まで小遣いをもらうことがあった。旅行も月に1度は出かけるほどで、今回の旅行もお金はおばあちゃんが出すという話だった。

「ママー、旅行はもう行かないの？」

「うーん、そんな気にならないでしょう。計画した人が亡くなったんだから」

「だけどー」

妹の法子は口をとがらせていた。真子は妹を慰めながら

「でも、旅行好きのおばあちゃんだから、出かけることを喜ぶかもしれないよ」

「うーん、パパと相談しましょ」

その夜、夫の総平は娘たちの願いを聞き入れた。行く場所は草津温泉。義母の計画通りに。

「いいのかなあ。おばあちゃんが亡くなって温泉って」

「いいよ、母は旅行好きなんだから、写真でも持っていてやろう」
「そうね」

そう話していると、電気がスーッと消えた。

「おい、蛍光灯換えるから持ってきて」

「でも、替えがないわ」

「じゃ、明日買ってこいよ」

「はい、でも、まだ3カ月しか使っていないのに」

総平は安物買ったんじゃないかとブツブツ言っていた。

「長持ちする高いのを買ったんだから。いやあね」

と美沙子が言った途端、電気がついた。

「なんか気持ち悪いわね」

2階の子供たちにも旅行の話を伝えてやろうと、階段を上がると

「美沙子さん」

「はい？」

今の声はおばあちゃん。ぎよつとして後ろを見ると、にっこり笑うおばあちゃん。

「ひーっ、おばあちゃん。どうしてそこにいるの」

「そんなこと言ったって。おじいちゃんは若い時に亡くなってるから、私がそばに行ったら、こんなばあさん知らんって言つのよ。ひどいと思わない？ だから、帰ってきちゃった」

「えーっ、帰れるんですか」

「でも、足が無いのよ、ほら」

「ひーっ、ぱ、ぱ、パーっ！」

美沙子は階段をまっさかさまに落ちてしまった。驚いて出てきた総平は、妻が口から泡を出して倒れているのを見て、腰を抜かすところだった。娘たちは大音響にびっくりして部屋から飛び出した。

「ま、ママー！、大丈夫？」

「大丈夫よ」

「大丈夫って、泡を出してるじゃないか、母さん。母さん？」

振り向くと、死んだはずの貞子。

「えーえーえーっ！ 母さんどうしてここに」
娘たちも倒れた。バババババ……と言いながら。総平は立てなかった。

貞子は楽しそうに笑いながら、自分の部屋に帰って行った。すると、

「総平！ ベッドが無いじゃない！ どこやったの」

「母さんは死んだんだろ？ ベッドは処分したよ。仏壇置くために」
「あらー、いやだあ、私の仏壇はこんな古くさいのー、もっとモダンなのにしてほしかったわ」

「仕方ないだろう。今さら帰ってこられても」

「なあに、あんたはいつからそんな冷たい子になったの？ 折角旅行も行こうと計画してたのに」

「だけど、母さん。本気で帰ってくる気なの？ それはどうかなあ」

「何がどうかなあよ、父さんだって若い女の子が周りにうじゃうじゃいるからご機嫌なのよ、私なんかいなくても」

訳わかんないよと総平は言いながら、倒れてる娘と妻に声を掛けた。

「おい、大丈夫かい。おばあちゃん元気だよ」

その一言で、またみんなは倒れたのだった。

貞子は仏壇の写真も気に入らないようで、アルバムから若いころの写真を選んでいた。

「総平、写真はこれにするわ」

部屋に來た総平は

「母さん、それは50歳のときでしょう」

「いいのよ、これが素敵だわ」

「分かったから、早く帰ってやれよ、お父さんのところに」

ふーっと、電気が消えた。

「いいよ、帰ってこなくても」

その声は、お父さん。総平は

「二人ともいい加減にしろよ。もっと仲良くできないの！」

「お前はこれが母さんだっていうけど、私が知ってる母さんはこっちの写真の人だから、このおばあさんは違うよ」

「違わないの！ お父さんは20年前に交通事故で死んだけど、お母さんはついこの前まで生きてたの！ だから、この人があなたの嫁さん！」

「そうかなあ」

「そうなの！」

ああ、頭がおかしくなりそうだとつぶやきながら、総平は階下の妻たちの起きる気配に気がついた。

「パパー、どこ？」

「2階だ。親父までいてしまった」

あわてて口を押さえたが、妻が倒れる音がした。息子に冷たく言われたから、父親はがつくり来ていた。それを慰める貞子。

「やっぱり、こいつが貞子みたいだな」

「そうだよ、父さん。二人で仲良くあの世で暮らしてくれよ。墓参りは行くから。母さんをちゃんと連れて行ってやって」

「ああ、邪魔したな」

「私も父さんと行くわ」

二人は仲良く手を取り合って、2階の窓からふーっと、空へ飛んで行った。総平は大きく手を振りながら叫んだ。

「とうさーん、かあさーん、見守っていてくれよー。来週、会いに行くからねー」

そう言いながら、ほほを伝う涙をぬぐおうとしなかった。

下から娘が探している声がする。

「パパー、パパーどこにいるのー」

「ここだよー、おじいちゃんたちを見送ってるよー」

娘の倒れる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7545k/>

黄泉の国からこんにちわ

2010年10月8日14時20分発行